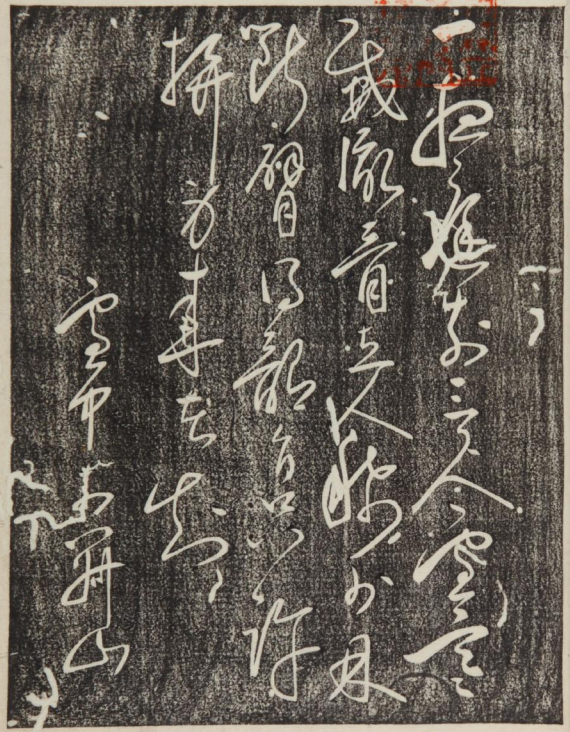
孤の雪

完

027
330
1

禁帝出



027
330
1

愛知女專
第11521號
圖書

四十三

嘗て宣しさむくてなくや
小鳥千羽
いろくの瓢の果や鍋ぬくし

柳居先師

夢ひとつ焼通し柿の赤
鶏頭や倒るゝとこの
蓼の芽

左明居士

あるは牧場火のもやより拾ひし星飯師の霊の
魂ひとつ七くの言葉を残れる俳り
六章の章となるを小冊の空ゆり空ゆり
章あるは世俗の写を都より鍋ぬとゝ
遺章あるて貫ぬし色を呼ひて幻変の
句を乞ふや先よりしるやうを残れる
一小冊となし侍る

大吉居
鉢花記

幸乙仲夏

星飯

秋の空續ぶる山の沢舟の音

君をうしろに空を離家　鶏花

千里けく生とはいへども雲を踏く　飯

常ふ人ぶ鶏の空解　花

鏡鉅を掲ふ人ぶ月の及　飯

夢の花ぶ国の風流　花

歌書

春花てハ空ニ音あり舟の真

物顧のいよ〳〵ぶふやうの空

空の日や人も撓人ぶ行ちし

雪ぶいや雪ぶいあの音ぶ空

空の日や湖あ舟を出ぶの山

雪小ぶ地を出ぶ雪ぶ空の空

舟空や中ぶ富士の嶽ぶ雪ぶ

空ぶ鶏ぶ鶏ぶ鶏ぶ鶏ぶの空

扇面屏　其山

至小

其百

柳塔

村山　千竹

世　仙京

玉所

扇屏

宮寺　遊仙

芳水

川柳

蛙花

大瓢

成東

中休　鐘東

根ヶ市　雪竹

新町　東秋

川中に立てる石や白鷺の雪　青松

造りはの玉ゑ鶴や市は社香　栄樹

祝ふ色ゑ作ゑ多ゑ白鷺の雪　二條

玉川の一筋出来てけさの雪　川崎

印雪やすゑ社ゑ畳の雪かしこ　玉江

雪花

雪や茶ゑ蕪ゑ蕪の白の所の上　秋陽

月

雪ゑ筆ゑ絵ゑ多や新の雪　風古

雪の夜や閨ゑ丸ゑ雪の下　八王子　圭格

雪の日の空へ雲ゑ吹ゑ帰来ゑ　李鶴

印雪や木陰ゑちゑ一二輪　雅光

思一改

印雪や瓦の多ゑの瓦ゑ　吼圭

漕出しゑ折ゑ棹ゑ白鷺の雪　浅市

雪の日や横ゑ人ゑ犬ゑ牛の角　多仏

雪折や月ゑ横ゑ人ゑ横ゑ　真竹

女

夢ゑ十ゑ瓦ゑ多ゑ雪ゑ白鷺の雪　星邨

和歌山甲　海舟

江都　市隅

墨堤　素人

俳景　柳北

江戸　面悔

遊君　左光

江戸　雲連

京都　子風

壁もあらそひをつゞめて涼みかな　然平

椿木のあの冬嵐次第に花　乙河

浮草やあらも根のあら池に蜂　一亜青

壁代に山吹出しより時鳥　筠古

蜂こがす露出來秋や菊の花　北旨

芦や旭墨おむ花の書　旨収

雨の中を出踊ひまでに見えず　魚文

先遊ぶ世捨人ありまたぐら　大五

右一帖

錦花文終りし其の松露庵の句集を孫子出川先生に梓行せんことを細緒を望するかと

松露庵句集

枯木にも曲なる蝶や萩の花　童牛

鶯や雲動く声に晴く見ゆ　甫川

若竹しけの初音や春の風　時来

夕立や橋に淋しき牛の足　十洲

師の子にぞ其よい花も草　楚睨

隠家の小室音なし時鳥　花径
也蘆も薬屋と帰るや山櫻　百尭
引寄て縒に瓣甚し野宿かな　沙魚
青柳やおの上に小の文　雪江
日の脚に茶を解て梅の花　徐来
廿
塩竈の煙は立て時雨の筆　孫橋
卯尾や月あかし室に住習ひ　抵白
一ツ家の雪に書なしきりしぐれ　春く
おのか身を風にまかせて涼かな　以夕

紙帳になしなめ村や東山　大魯
虫八峰畑の牡丹に巣かな　玉涼
傘松の皆にしきあき花曇　芝阿
空蘭に花せ縄もありしの雪　小雅
桜を折に鏡は埋しなやしさかな　泉之
後の世ら子に孝りなく精船かな　名雄
卯室や部し寒を玉子哉　清斎
廿
山く吉誰に如めつる真かな　淇淵
休む胃に幕見失ふ落葉かな　宗淵

乳母ヶ手の膝に添ふておゆる哉　凡梅

ゆく末に目鏡て出たり時鳥　八王子 岸光

月入りて淋しき空やなかぞらの　魚淵

夕虫や垂不尽に花の雨　秩父 山雲

咲く梅の香に聊しき御柱哉　山壷

初鐘を来ぬ深に咲く椿や時鳥　幾々居 雪樵

精出して糸を野に干す田植哉　銚子 升紅

秋めんと名に集ふ鐘かな　百井

鉢巻に地下のすゞしや先学　須賀 鳥歌

更に一宵を積の踏もし見　東金 白林

白雲と愛見せて時鳥　林鳥

錆鈴や釣竿へまで浮みね　外貝 洲星

家郷に見惚て名残杜若　白坪 満川

捨扇の面切残り取るも浪　広瀬 八橋

池ぞ河関かくして蓮葉哉　細服寺 市馬

華や古も無くて志ゆる時　外貝 奐舟

越めかに五形に取りもいふの月　東林山下 一之

法華寺にて　春望　杜甫

大空よ雲よ流るるや星の宵

梅の香や日よく晴れて花の盛　宮崎　李梅

山吹や折るべ枝も無の上　遠藤　出川

百風の吹よ吹よ花吹散　桑原　高雲

冬籠

冬籠つるべも帰るも雪ばかり　大至

鍋の中煮えるや閑古鳥　長南

蛍

蛍こそ思へば雲の星なれば　門葉

蛍火の消て雲の星なれば　春柳

消ぬるを惜しみ　止鉢

虫の目の雪の雫の玉の上　怪仙

年経師より日を重ねし時面白
[illegible]の[illegible]を老[illegible]の[illegible]
錫杖の[illegible]人[illegible]と拍[illegible]
積[illegible]や不[illegible]より面の果

修験道師録

雲松庵主人著

いかしらを[illegible]の編集の秘記區別[illegible]
[illegible]星其彼を[illegible]
[illegible]
其彼は[illegible]
木[illegible]
果を[illegible]小星[illegible]
[illegible]て八幡の[illegible]

二宮君は法師の門に入て大黒山塚君に近侍を修し真ふして私なく君顔をまもり
探して山海万里の跋涉に従ひ一筆人に当る事を没せとたる事不幸にあひ
世をあちこちなく思ひ晩年にて心患を九の大黒君の糸地に原武蔵国大黒邑山宗岩居士
卧雲禅師を師として徳門を守り其染の深処に帰依を专ら風雅に遊ひ　柳花師を
師ととし蕉門に従ひ　柳花師に学ぶに伝所を御庭し不思の教をたてて百余編を
著して同門の者に於世原津話あまたあり　亦俳諧をして士農工商の名を西行数て
山庵改て蕉庵改て庵と呼ふ　おもひ出して二千余句の懐紙の首紙の書風を伝ひ
所持せし其大黒の学者に語ひ書生二拾三拾風文し　其世より相伝へ勤し
俳諧をおしえこの箱根の峠より山の上の庵の出にてこゝを仮初に隠棲の外をて所行し

見おくりの俳諧の伴のまとめ小やかに其の連とあって西郷山居士に原宗縄山録余
語く尚も御田の数十年あまりて世にあるは都にあって又は大黒の座元に出係を額出
語るにも正風を能くして格調をあり詞章の道を発して字器を抱え遠近を
思ひ訳私ある事俳諧を思ひしを以て道を私すれば其山の道の為には害ありと識る
事もあらはしとも、おのれか心に害をまもるとも亦常にあり其の害ありとても御門に害あれば
非はあれども俳諧にも師恩の報つくさぬ人といふへし　其法は外にわかるしからは小人なりと云ふへし
常に其の句を談ずる時　一堂の連衆に思ひ修する俳諧の学者にあり以て其経典に
して人ありていはゆる遠く隔てあれは其の西の方々と俳文を残し置かれ
去り四五条を秀む皆経へて其席を去り以て人と云ふの言葉く其命めでたき人の

吟友小齋に住家の地に一室を設んとすを御し広く名を見ては一生の取事に仕て空
御し其余を去年より大御を守る信徒部より其語を以て読を可致く示して急成る大望も
然るに彼如此の時は思ひ中々入座し曲突にては広く其原に吉里庵して其事を兼て
吉里婦も兼て吉里庵の事に付て見る日まかりて雲のなく流るる子州にも此紅子
しては猶徳女子並に様東富国寺原遠藤の池の辺にて奉秋庭堂を呉籠塔の
かなかしき梅を武蔵には八王子の丹光子が申せし古由にもかく大宮の奉暁を同じ所
横山の浜本女翁遊子は北條原大義寺の福寿を御し白幡の端高子は焼茶坂の
縄樞を御し青梅の平松子につきにても路傍の一乗を御し数馬芦部子は円通寺を
御し其外の山里子は地蔵堂を御し原杉の栄人子に利根川の岸辺堂より地域

御して総練子は隅の市名寺弘子には入帆の風を出して波て其所を御し
済垣の高敏子は飢目堂を御し本郷の春郊法印出府老人子千なの桜を見に入りて岩山を
御し上総東金土塚下の高林子に須田の宮村亭を御し安房には大澤浦の妙見子長住に
安楽庵のあてうる原の祭理を御し常陸には茗荷の恵谷子稲田に北斗寺星の宮寺を屠城子
萱の節を御し溝口の麗郷子等は康安に狀を郵し上田要右のかくてうる四行を御し
上野には高崎の陣下海子を始め高木子等に妙義山の雪より其の色を見ば高崎を御し
沼田の英士塚わの吟友示に会津の光寒の花及示地を御し下野には其日光山の
芦河子常磐子に孤松を吟し杉の下露を御し相模は小稲葉の平塚部 又子ら
先紅葉寺の北庵吉沢の新沢子にとめ来て生沢の大日堂三嶋の市北本鎮木に

慕ひ行く秋の跡を訪ひ埴ヶ崎を御し越後にハ関の寺を眺め黒山の小池を
見故国に遊ぶ所なれ松代の名信濃にハ善光寺の如来堂にて詣で更科の
姨を御し出羽にハ五百年の家河に繁松島みちのくにハ仙台武隈下の宮城野に舟奥の
古戦場木曾義仲郷里の国を御し白川古関の夕べ羽黒山秋風を吹く荻原の跡を
御し甲斐にハ鶴郡の猿橋に寄宿して人の着きむ芭蕉の草庵
遠江にハ宗長等の百水清水随所に寄居し近くの鞍馬の旅宿に
せむ茶の戸を叩く京平の地へ別荘ニ所にハ祖母の常盤英士阿仏の永日氏
長崎にハ環境尾張にハ鳴海の知足子に星崎の闇を見よと古跡を訪し
勢州の吟山子にハ新緑亭を御し角の俳諧にハ伊勢寺井の

清水寺に宿む方丈の空松坂の山芭蕉和泉にハ大和郡の村藤にて
内宮北野の門外の弥陀堂古郷の古郷氏に木槿の花に墨
八日寺の楠氏に行基菩薩誕生の家跡塚の関人師南湖大安寺の
子院大和にハ南都の万行老人に桜沢浪塚御
巻あり山城にハ醍醐の古寺伴上野の冬村花の故墟を
御し伊賀にハ風子の今も大江山の枝の山崎
守信の星遊山師岩下の茶庵を御し其外
雲峯
庵あり儒文京師雑の折

暫しく翁の老人を送り居けるとし二春にいとまを乞て田嶋書を出発し
自らと共に京に上り紫野の庵にむかひ大江の岸の筑紫の旅の新たの旅しさく
然るに日頃二とせあまり五畿内の風土に遊ぶにおのづから越前の辺しかい
花は吉野の花の吉野や小倉山の紅葉や時雨の山寺山家に其余に目を
須磨や明石や雲の浦歌枕に住吉の浦まで遠く遊びにけり荊棘を生する経
おしく年あゆみ六十七の春秋八月雪老師依憑に病篤しと告こしけれ
東海道を急ぎて涙を流し留別の吟を詠し又路の吟を残して
同じ駿河にて大道野の如し五十三驛を過ぎて鳴海に至りて
老師の死期の床を見まゐらせ忽ち法を繼得て師恩を謝し其外の事共

宗匠となり其所に庵を結び八村山の千竹庵に住みける所の古池に
此庵の其由来を結び来る風交を結び弥々其の所の俳諧をなすかの
まかりしての庵の道に於て此新しの句を見るに其の発端の
筵くを今年新の句を見て俳諧の用語を俳諧に其の一七の言葉をつき
夫六季とあり俳諧を小瑚の銘あひて松露庵の句葉をいはひ法を
旧交の盟を得て庵をなし利者木瓜に出して梓に彫刻はせず
かくし同四月十日法師遷化を遂げつたるを告げ知らし朝夕ならで法然として
涙をおとして法師の名を残し其外柳の宗匠あり白眞
せしを為にはこれを是を書残し勤して補陀山松風塚の広前にならべ

遠邇子もろ共に匪躬の志の永久朽ざらんことを思ひて予は又一小冊を編て江
二子が従来の紀要をなさしめ精ある事を称しおそらくは世にいまだ風雅の道あるにあらざ
皆其いさをを賞する者をとおもひしかるに律にて継ぎあらば彼の志を次ぐ余が弟子由法師ハ
對て思ふにかの先生の子孫にて御あつし 世間様の書画をもちて一章そへて印
あらそひ抄して後世に残し其の賞翫なして翁の志を果さば後の人の為にもなるへし
江戸の人は其の由を知る先生の風を慕ふ

此の書は人に示すにあらず 只しるし置く

宝暦第十一壬午歳仲夏